

う膜炎を惹起した。肉眼的に炎症が前部ぶどう膜から後部ぶどう膜に波及する所見に対応する VFP の測定結果が得られ、実験的ぶどう膜炎の炎症強度を VFP が評価しうる事が示唆された。

8. 血中タイコ酸抗体測定の臨床的意義について

(臨床中央検査部) 大井 聖至・清水喜八郎

目的：タイコ酸はグラム陽性菌にのみ存在する細胞表面物質であり、全身性の黄色ブドウ球菌感染症でその血中抗体が上昇することもあると言われており、その臨床的意義について検討した。

方法

各種細菌感染症より採取した血清にて Gel diffusion (GD) の Ochterlony 法, counterimmunoelectrophoresis (CIE) でタイコ酸抗体を測定した。

成績

CIE では 8 倍希釈以上, GD では 2 倍以上を陽性とし, CIE では黄色ブ菌敗血症の例中 1 例, GD では黄色ブ菌心内膜炎 1 例中 1 例, 敗血症 9 例中 2 例が陽性であった。抗酸菌感染症についても検討し, CIE, GD で結核 82 例中 1 例のみが陽性でこれは粟粒結核の症例であった。類では CIE で 152 例中 25 例, GD で 28 例が陽性であった。類の病型別の陽性率を GD でみると類腫型の 46.2%, 境界型の 16.1% が陽性であり, 未定型, 類結核型では陽性例はなかった。

考察

血中タイコ酸抗体の測定は黄色ブ菌心内膜炎, 敗血症の診断に, ときに有用につかひ得る。それ以外に抗酸菌感染症とくに日和見感染としての結核菌感染あるいは類の病型判定に利用できる可能性もある。

9. インターフェロンによる造血幹細胞・増殖に対する抑制効果

(第一内科)

山田 修・押味 和夫・溝口 秀昭

目的

インターフェロン (IFN) 治療の副作用の 1 つとして貧血, 白血球減少, 血小板減少などが経験されるが, 遺伝子工学で得られた γ IFN を用い, その造血幹細胞に対する作用を検討した。

方法

健康成人骨髓血より有核細胞を分離し, 軟塞天単層法により CFU-C アッセイを, プラズマクロット法により CFU-E アッセイを行なった。各ディッシュには γ IFN をそれぞれ, 10, 100, 200, 400, 1,000U/ml の濃

度で加え, 37°C 5%CO₂ で 7 日培養後コロニーの観察を行なった。さらに, あらかじめ培養系からマクロファージを除去しておき, その影響も調べた。

結果

CFU-C, CFU-E とも添加 γ IFN の濃度依存性に抑制された。その程度は CFU-E で大であった。マクロファージの依存の有無での γ IFN の抑制効果は影響を受けなかった。

考察

γ IFN は CFU-E を CFU-C より強く抑制することがわかった。またその抑制作用にはマクロファージの関与がないと思われた。

10. 無担体連続電気泳動装置を用いた 4 時間培養 MLR の検討

(腎センター・移植免疫研究室)

安尾美年子・早坂勇太郎・高橋 公太・東間 紘・太田 和夫

腎移植の際の組織適合性検査として最も重要と考えられるリンパ球混合培養 (MLR) は培養から判定までに約 1 週間必要であり, このため屍体腎移植では術前の検査が不可能である。

一方, マックスプランク研究所の Dr. Hannig らは 3 時間培養 MLR の上澄で処理した羊赤血球指示細胞を用いてその電気的易動度と MLR の強さとの相関性を報告している。

その実験によれば羊赤血球指示細胞の電気泳動易動度は control と比較した場合に従来の MLR で刺激を認める場合には増加し, 刺激を認めない場合にのみ等しくなる。

今回我々は Hirshmann 社の ACE 710 型チャージセルアナライザーを使用して 4 時間判定の MLR を検討した。培養条件が最適ではなかったため十分な結果は得られなかったが, 自己と非血縁との反応に差がみられた組もあり, 今後その原因となるメディエーターについても検討する予定である。

11. 全身性アミロイドーシス剖検例：特に AA アミロイドーシスと AL アミロイドーシスの検討について

(第二病理) 豊田 充康・佐藤 昭人・森本紳一郎・梶田 昭

我々は第 73 回病理学会で, 全身性アミロイドーシスの剖検 7 例を KMnO₄ 前処理法および酵素抗体法 (抗 AA 抗体) を用いて, AL アミロイドーシスと AA アミロイドーシスに分類した。今回さらに症例を追加して